

同 志 社 大 学

2009 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月15日提出

所 属	職 名	氏 名
文学部 国文学科	教授	石 井 久 雄
研 究 題 目	古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>古典文芸諸作品に見える用語について語義ごとに出現頻度を算出し、その頻度の特徴を検討した。科学研究費補助金による挑戦的萌芽研究「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究」（代表者石井）と、同標題で連携させた。</p> <p>1 語義は偏って出現する</p> <p>多義語では、どの語義でも同様に出現するのではなく、どれかに大きく偏って出現するのが通常である。このことは、古典文芸作品のみに限られた現象ではなく、現代語・外来語・形式語といった領域でも成り立つようである。</p> <p>2 語義は前後の脈絡と密接に関係する</p> <p>語義の決定は、前後に出現した用語と併せて捉えられるべきである。大頻度の用語でも、出現したときに意味的に関係するのは前後の数語であり、その数語は相当程度に限られている。つまり、多義語でも、或る少数の用語と共起して語義が絞られることが多く、それによって語義の偏りが出るということになる。</p> <p>3</p> <p>以上のような成果は、次年度以降に遂行を予定している『とはずがたり』用語辞典で、語義の記述のうちに活かすことになる。</p>	